文部科学省認可通信教育

たんぽぽ

vol. 68

平成２１年１０月発行
発行者　放送大学
　　富山学習センター
責任者　所長 渡邉 裕司

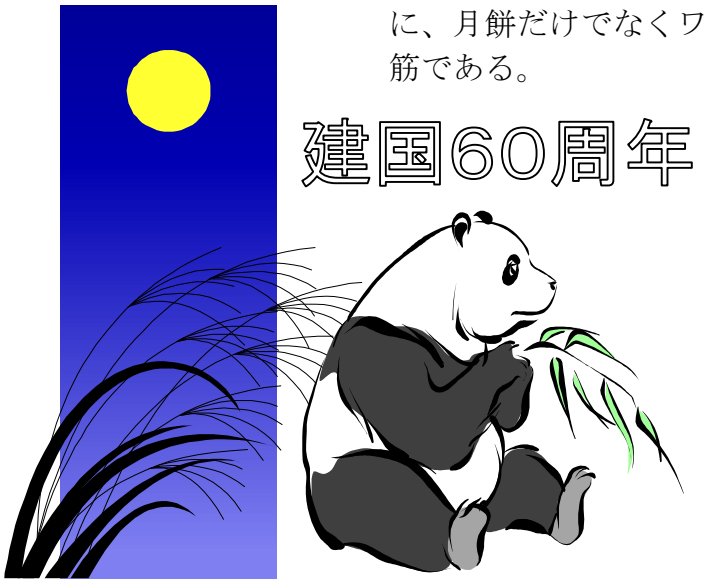
還 暦 と 名 月

客員教授　今 村 弘 子

2009 年 10 月 1 日(国慶節)、中国は建国 60 周年、すなわち還暦を迎えた。抗日戦争、国共内戦を経ての建国であり、1949 年当時の一人当たりの国民収入はわずか 66 元であった。それから 29 年間がたった 1978 年末に中国は改革開放政策を始めたが、当時でも一人あたりの国民収入は 315 元(約 183 ﾄﾞﾙ)にすぎなかった。改革開放後の中国は高成長を遂げ、13 億人の人口を抱えていることもあり、中国全体のＧＤＰ（国内総生産）は本年には日本を抜くのではないかとさえいわれている。

ＧＤＰが世界第二位になるだけではなく、サブプライム･ローン、リーマン・ショックで傷ついた世界経済の牽引車はいまや中国経済になっている。4 兆元（約 57 兆円）もの公共投資を行い、内需を喚起し、高成長を保っている。家電製品や（小型）自動車への補助金のおかげで、それらの販売は好調、自動車城下町は活況を呈している。それとともに富裕層の間では、旅行も盛んになっている。日本への個人旅行も解禁され、いまや中国版デビットカードである「銀聯カード」は日本でも通用し、銀座でも最大のお得意様になっている。デビット･カードを持って（？）多くの中国人が国慶節の喧騒を避け、旅行に出かけた。

例年国慶節は連休になるのだが、今年は 10 月 3 日が中秋の名月（中秋節）でもあるので、例年より長い連休となっている。欠けることのない満月は一家団欒の象徴であり、人々は月餅を食べながら､月を愛でる｡帰郷する際には月餅を土産として持参するのが恒例であるが、年々贈り物の月餅の包装は派手になっている｡「過剰包装では」とつっこみたくなる立派な箱に、月餅だけでなくワインや高級酒などを詰め合わせたものが売れ筋である。



かつて「ジャパン　アズ　ナンバーワン」といわれ、うかれていた日本は、バブルの後遺症を抜け出したといわれながらも、いまや自信喪失に陥っている。それに対し、所得格差や民族問題などの問題を抱えながらも、Ｇ２としていまや中国は自信を持って歩んでいる。国慶節には「後の月（十三夜)」が天安門広場を照らすだろう。月は満ち欠けし、経済はアップダウンするものであるが、それでも満月は必ずやってくる。今後幾つもの満月を迎えて中国経済はどのような発展を遂げるのだろうか。